

対談 文科の七〇年

二〇二四年七月末、三浦佑之元短期大学文科教授をお招きして、高橋修先生との対談の場を設け、「文科の七〇年」についてお話しをうかがいました。

一 はじめに

高橋 今日は忙しいところお運びくださいます、ありがとうございます。
います。どうぞよろしく願います。

三浦 こちらこそ、どうぞよろしく願います。

高橋 三浦さんはお変わりなくいらして、僕の方が先輩のように見えてしまう。

三浦 いやいや、そんなことはありませんよ。

高橋 お嬢さん（三浦しをんさん）は、ずいぶん活躍ですね。文科の学生にも人気で、卒論で取り上げる学生が何人かいます。

三浦 そうですか、ありがたいですね。昔、時々三号館に連れてきてましたよ。三歳とか四歳の頃かな。それで、授業の間、助手さんに面倒見てもらってて。

高橋 なるほど。じゃ、僕が共立に来るずっと前のことですね。僕が赴任したころ、三浦さんから、お嬢さんが大学生になったと伺いました。

三浦 ああ、ここへ赴任したのは一九七六年四月です。その歳の秋に子どもが生まれたんで。

高橋 僕が文科に着任したのは一九九一年ですので、だいぶ前のお話ですね。ということは、三浦さんは一九七六年から一九年間お勤めになられ、九一年から三年間ご一緒しました。三浦さんが千葉大に移られた後、僕は三〇年間居座ったので、共立文科七一年の歴史のうち、今日のお話で、四九年間はフォローできるといふことですね。いろいろなこ

高橋 修・三浦 佑之
(聞き手…菅生 早千江)



とが思い起こされそうです。

三浦 高橋さんは、来年三月に退職するそうですので、今年七〇歳ということですか。早いもんですね。あなたは来年四月で辞める人の中でも一番長いんですか。

高橋 そうかもしれません。初めてここに来た時から、なんだか過ごしやすくて、つい長居をしてしまいました。

三浦 そうでしょう。僕にとっても居心地のいい職場で、雰囲気がとてもよかったです。

高橋 思い返せば、最初に僕が大学に勤めたのは一九八五年のこと（当年三〇歳）、千葉県の本八幡にある昭和学院短期大学というところでした。とてもアットホームな感じの学校でした。

ただ、朝九時から毎日（週四日勤務）朝礼があり事務室に集まってお茶をいただかなければならないのが辛かった。ぐーたらな大学院生だった僕には、なかなか重荷でした。でも、学内における共同体的な付き合いを学んだり、入試問題の作り方などを教えていただいたりしました。

新米教師にはそれなりの意気込みはありましたが、キャリアと内実が伴っていませんでした。あのころの教え子たちに会ったら、つまらない中身のない授業で申し訳なかったと謝りたい気持ちです。懐しく忘れがたい修行時代です。

六年後、僕が赴任した当時の共立には大量の学生がいて、なかなかにぎやかでした。それゆえ、学生と密なコンタクトなどは取りようがなかったので、意外に拘束時間が少なく、大学教員らしい自由な時間を過ごしていた記憶があります。全共関係の残党も多数残っ

ていて教授会では大きな声が飛び交っていました。開かれた自由な雰囲気だ。漂っていて、ああ、新しい職場に來たんだな、という実感をもったものです。

三浦 確かにそう。教員はお互いに干渉はしないで好きにやってましたね、皆さん。

教授会では議論沸騰というようなことはしばしばでしたし、その流れで飲み屋に行つて続きをやるというような感じでした。みんな僕より年上の人ばかりでしたが、とくに遠慮しなければいけないというようなこともなかったですね。僕のすぐ上の世代の何人かの人たちが自由な雰囲気を作ってくれていたのかもしれない。よく、飲みに行つて飲んだくれていました。

高橋 昔風の教員の付き合いですね。僕は、年齢的には下から二番目だったので、ここでもいろんなことを鍛えられました。先生方はみなさんバリバリ研究してらっしゃって、とても刺激になりましたね。

二 文科の歴史

高橋 本日、三浦さんをお呼びするにあたり、少し文科の歴史を調べてきました。

一九五三（昭和二八）年に短期大学文科第一部・第二部が開設されたのです。同時に教職課程が認可され、中学校教諭二級普通免許と学校図書館司書教諭資格を取得できました。当時の牧一（まき・はじめ）短大副部長は、研究社の『受験と学生』という雑誌に

次のような学園紹介文を載せています。

「言語は死せる文字ではない。又単なる音標や記号に止まるものでもない。言語にはその背景に民族の歴史があり、その思想感情が根ざしている。これを駆使し、これを活用して思想感情を表現し伝達すると共に、これを把握しこれを理解し教養を高め文化を向上するのが、言語修得の要諦である。」

まさに「ことば」を大切にしている現在の文科にもつながる崇高な理念ですね。その当時の定員は、『共立女子学園百三十年史』（二〇一六年）を見ると、以下のようなものでした。

文科第一部 国語専攻五〇名 英語専攻五〇名
文科第二部 国語専攻五〇名 英語専攻五〇名

しかし、予想以上の志願者が集まり、文科第一部の志願者は四一〇名（うち入学者一六一名）、第二部の志願者は一九五名（うち入学者一五〇名）を数えたそうです。

その後も志願者は増え、九年後の一九六二年の在籍者数は、文科第一部一〇四九名、文科第二部は八二二名になったそうです（『桜の友』新版第九号、一九六二年による）。入学定員も一九六〇年に第一部日本語専攻一〇〇名、英語専攻一〇〇名に変更されたわけですが、定員の二・五倍くらいの学生がいたことになります。

三浦先生が一九七六年にいらしたころはどんな感じだったのか。

三浦

多かったですね。あのね、僕が来た時は学生定員は少し多くなっていたんですが、とにかく学生数がすごかったんですよ。短大の国語第一部は定員が一〇〇人だったと思いますが、一部の入学者は三〇〇人を超えていました。

高橋

三倍？

三浦 はい。定員の三倍ちょっと取った。それで、定員は二部も一〇〇名だったのかな。それよりもずっと多い学生がいて、一部も二部もすごかったんですよ。それで、英語専攻も同じぐらいいたでしょう。だから、三号館には、文芸学部の一・四年生も入ってたんですけど、圧倒的に短大の学生が多くて、教室がもう足りなくて大騒ぎしました。いつも。三年目ぐらいまでは短期大学部でしたっけ。呼び方が違ってたんですよ。

高橋 きっと、文芸学部より人数が多いのに、「短期大学部」では納まりがわるいので、「短期大学」に変更したんだと思います。

三浦 定員の三倍って普通だったような気がするな。一〇〇人の定員で、一部は三〇〇人。文科省も特に指導しなかった。定員の二・五倍以下、という指導がされたのは一九九一年です。

高橋 そうですね、一九九一年に文部省の指導で「臨時定員増」が実施され定員の厳格化が図られたようです。

三浦 一学年に三〇〇人いるから、一学年三クラスにするには、一〇〇人ずつのクラスを三つ作って、それで二部が二つくらいクラスがあったのかな。

それで各クラスに一人ずつ担任の教員がつかないといけないし、

助手も一人ずつかなきゃいけないので、国語専攻、英語専攻にそれぞれ助手さんが一〇名ずついたと思います。赴任した最初の頃は、国語専攻でいうと、一部の助手が六名、二部の助手が四名。はじめは教員研究室に分散して配置されていたのですが、のちに、助手室を分離したのではなかったかと思います。教員研究室は個室ではなくて、大きさによって何人かずつ同居し、そこに助手さんがいるというかたちでした。助手が、学務などの事務がやる仕事まで受け持っていましたから、そういう点では学生との繋がりはとても親密だったように思います。

国語専攻の専任教員は十数名で、一部二部兼務というかたちでした。その何倍かの非常勤の先生に来てもらっていたので、授業を組むのがたいへんでした。ただ皆さん、神保町の古本屋街を廻れるというので、喜んで来てくださったように思います。

※注 その後、一九九四年に専攻名を改称して、文科日本語・日本文学専攻と英語・英米文学専攻としました。

三 授業風景一九七〇年代、八〇年代

高橋 そのころの学生はどんな感じでしたか。

三浦 当時は、短大の学生さんは向学心が旺盛でした。初期の頃、僕が来た時は、ほんとにずいぶんできる子いっぱいいるなと思いますもん。うん。その当時は、四年制より女性の場合は短大の方が人気があった（他のところもそうだと思いますけど）。しかも就職

がむちゃくちゃ良かった。で、四年制だとなかなか就職がうまくいかなくても、共立の短大卒業生は、この近辺のトップ企業へどんな行っちゃう。そういう時代でした。

高橋 親御さんが四年間大学に通わせるっていうような社会的雰囲気、きつとなかった。

三浦 そうですね、それはもう明らかです。地方から来てる人たちも結構いましたしね。で、都内の女子学生たちは、一流企業行っただって何年かいて結婚して退社してしまうので、企業自体が短大の学生を歓迎していた。

高橋 四年制大学よりも二年間だけは長く勤めてくれるって。結婚するまでの間。

三浦 そう。社会も会社も、そのような存在として働く女性を考えていた。ちょっと気立てのいい澁刺としている女子、本当にもう露骨にそういう感じだったんじゃないでしょうかね。

高橋 じゃあ、もうずっと会社に残って、お勤めしてほしいっていう感じじゃなくて。

三浦 それはほとんどなかったんじゃないかと思います。勤め先によってはもちろん違うでしょうけど、ごく一般の企業はそんな気はなかったように見えました。そういう中で、共立は割と評判のいい学校だったんでしょう。

高橋 共立以外の短大で、二部はあまりなかったような気がします。

三浦 二部があるところは珍しかったです。特に神保町界限で言うのと、明治とここしかないぐらいだったんじゃないかしら。明治大学

は共学でちょっと雰囲気が違うから、女子だけの短大二部っていうのは多分近場にはなかった、しかもここ大手町が近かったりとか通いやすいじゃないですか。だから、昼間正規の社員として働いている人が多かったです。

僕が勤めた時は二九だったんですよ。で、勤めて最初の年に三十になったんですけど、その年齢だと僕より年上の人がいっぱいいましたもん、学生さんは。だから、そういう点では、可愛がってもらったって、二部は本当に和気あいあいという感じ。ゼミなんかでもね、年配の学生がしっかりリードしてくれたりして、やりやすかったという印象があります。

高橋 僕が来た時は三五でしたが、やっぱり僕より年が上の学生もいました。自分でお金稼いで学費を払っているというののもあって、とても熱心でした。小説読むっていうのは、やっぱりその人の人生経験とか、人間的幅がものをいうこともある。そういう風な力持つてる人って、やっぱり読めるわけですよ。そのような意味でも、本当に教えがいがありましたね。

三浦 ゼミなんか面白いですよ。例えば古代だつてそうでしょう。歌なんかやっててもね、反応がいいんですよ。だから、短大でゼミってかなり人数調整なんかがあつて大変だったんですけど、それでもうなんとか二〇人っていう風に、抑えて組んでたんですよ、一部の場合ね。学生に一人ずつ調べさせて、発表させて議論するっていう授業が成り立つギリギリでした。ところが、二部はもう少し少なめで授業ができた。そういう中に年配の女性なんか混じつてるとね、すごく活発に議論できて、楽しかったですね。

高橋 確かに楽しかった。文科二部に入学した学生に三つのタイプがあるといわれてたそうですね。ひとつは、相当以前に高校を卒業して改めて学びたい人。二つ目は高校卒業して社会人になり、同時に大学で学びたい人。三つ目は希望通りの進学ができなくて二部に来た人、という感じだそうです。

中でも、一つ目のタイプの人は、長い夏休みや春休みの終わり近くになると、早く学校が始まらないかと待ち焦がれたといいます。短大が楽しんだっただけですよ。

三浦 おそらくそういう人たちは結構いたんじゃないかと思いますね。宮内庁長官の秘書さんが通っていて、雅楽のチケットをもらったり、編集者がいて、雑誌のインタビューに出させてもらったりしたこともあります。

高橋 そうですか。僕のころは看護師さんが多かった気がします。看護師さんたちは、お勤めの職場とは全然違う学生のお友達という人間関係の中で勉強するっていうのが、とても新鮮だったようです。職場とは違う自分の居場所になつてたんでしょう。

三浦 そうかもしれない。二部の休み時間って、一コマ目と二コマ目の間が三〇分ぐらいあったのかな。その休み時間っていうのが、彼女らには楽しかったんでしょうね。おしゃべりや食事の時間ですね。

今でも、カルチャーセンターで講義をすると、その頃の二部の学生が聞きに来てくれますよ。僕より年上だったりするんですけどね。

高橋 羨ましいですね。二部は色んな人がいて、先生勝りっていう

のか、弁が立つ学生とかね。バスガイドさんで、バスガイドを指導する立場にある人がいて、もういろんなこと知ってるもんだから、授業でも活発に発言していました。パワフルで、授業に活気が溢れましたね。

三浦 そうなんですね。

高橋 二部の思い出話は尽きませんね。でも、二部の入学者は、一九九八年に二四七人で、二〇〇二年になると、これが一〇〇人前後に激減したんです。ここに何があったのかはつきりはわからないですけど、インターネットなどで勉強する機会が増えたのかもしれない。激減はとまらずで、二〇〇七年には募集を停止しました。入学者が減り始めてからあつという間でしたよね。

三浦 うん、子供たちの数が急変しましたしね。それと、大学行くのが普通になってしまったら、勉強意欲のある十八歳が少なくなるというのは当然の流れですかね。

高橋 二部で勉強したいぐらいの人は、もうどこかで勉強しちゃったんですね。

三浦 そうそう、そうなりますよね。そういう点では、使命を果たしたみたいな感じなのかもしれません。公立だったら、今、例えば公立中学とかなんとかって、夜間ってそうでしょう。そういう風にしてやってければまた話は別だけだね。私立でそれができるかどうかはむずかしいでしょう。

高橋 三浦さん、覚えてるかどうかわかんないけども、短大を二年間じゃなくて、四年制の二部にしたらどうかという議論がありましたね。

三浦 そういう話もあったような気がする。学科長をなさった竹内美智子先生などは、女子だけが短大に通うというのに反対をなさって四年制移行を主張なさっていました。

高橋 でも、いろいろな事情で実現できなかった。できたところで、何年持ったかわかんないですけども、やってみたかった。残念でした。

三浦 そこは流れとしてはそうなってしまうでしょうね。そもそも人口の半分を拒否しているわけですから。

高橋 あと、覚えてますか。二部から一部への転部試験。結構いしましたよね。記憶では、年に四〇人くらいトライしていた。

三浦 いましたいました。特にそれを目当てに入学してくるっていう二部の学生もどんどん増えてったわけですね。だから、働いてる人、昼間仕事持つてる人対象っていう風な意図が最初はあったんでしょけど、僕なんかがいたところから、大学入試に失敗した学生が二部に入ってきて、編入を目指すようになりましたね。今でも付き合ってる中には何人かいます。そこから大学院に行ったりして、研究者になった人もいます。

高橋 それはすごい。そういえば、後で出てくる文科の同人誌『あかね』四七号に『源氏物語』における「夢」の役割について」という卒論を載せている笹生美貴子さんは、源氏研究者として認められて、現在日本大学の国際関係学部に勤めておられます。

四 文科の構成・カリキュラム

菅生 英語専攻と国語専攻、そういう呼び名だったんですか。そういえば、伊丹十三の映画『あげまん』の中で、主人公が短大に行かせてもらう場面がありますね。そこで英文タイプを習っているシーンがあるんですが、それを思い起こされました。記録にも、「タイピング含む」と書いてあります。企業勤めしている人だったら、英会話ができるようになりたいとか、英文タイプを覚えたいと思う人が多かったらうというのは想像できます。

高橋 そういえば、「タイプライティング」という科目がありました。一九六三年に英語専攻は「英語教養コース」と「英語実務コース」の二コースに分けたそうです。それで、実務コースには「貿易英語」「会社実務」「統計論」「商事法規」とともに「タイプライティング」という科目が設けられました（一九八五年まで）。当時の女子社員に求められていたことが浮かび上がってきて興味深いですね。

菅生 そうですね。そんな中で、国語専攻を志望してくる学生はどんなことを学ぼうとしていたんでしょう？

三浦 国語表現とか、そういう科目が多かったように思いますね。だから国文学、英文学ではなくて、国語科、英語科って呼んでというのがありますけれども、国語表現とか日本語をうまく使えるとか、文章うまく書けるとか、そういう点では、ある実務的実学的な要素っていうのもかなりカリキュラムに組み込んでたんじゃないかなと後になって思います。

国語学の先生って結構多かった。全体で十二、三人いる中で、いつも四人ぐらい。で、それ以外に非常勤がむちゃくちゃ多かったからね。

とにかく定員三〇〇もいるから。その中でも非常勤で国語学の人たちが来てくれたから、だから、そういう点では、国語表現みたいなものに力を入れてたっていう気はします。だから、英語科には、タイピングルームなんかがあったのだと思います。今だとコンピュータルームですね。

菅生 なるほど、そうですか。

三浦 共立は元々出発点が女子教育でしょ。家政系の、あるいは食物系職業学校でしたでしょ。だから、そういう点では、この短大っていうのも、性格的には家政系があって、で、英語と日本語があったけど、やっぱり実務的な要素を重んじてたんじゃないでしょうか。

高橋 はい。それも功を奏したのでしょうか。

三浦 ええ、よかったと思います。

菅生 で、その国語学というのは。うん。例えば、それこそ接遇マナーの敬語などの口頭表現もあったのでしょうか？ その頃でしたら、電話を取るっていうことが女子社員の職場での一大職務でしたよね。

三浦 多分、僕は国語学をやっていないのでわかんないけど、内容的には多分そういう国語表現の問題でしょうから、実際に喋ることも含めてのことだったと思います。

菅生 三浦先生、もうひとつよろしいですか。先ほど、国語学の先生の方が多くて、表現のようなことの授業が多かったということ

したが、先生のご専門の科目に対する学生たちの反応はいかがでしたか。

三浦 いや、それはね、僕、ほとんど教員経験はゼロの状態でごへ来たんです。その前、助手しかしてなかったし。非常勤とかなんにもしてなくて、初めて教壇に立ったんですよ。だから最初は戸惑ってばかりだったんですけど、その頃の学生たちは割と見守ってくれてる。だから結構食いつきがよく、もうほんとに楽しくしてました。ただ、人数が多いので、多い時は一〇〇人以上の学生がいて、教室びっしりで、もうおしゃべりするやつはやたら多かったです。だからどの教員ももうそれでは困ってて、中でも一番良かったからかな。

高橋 舐められないようにしないと。三浦さんは強面（こわもて）なので、学生も近寄り難かった？

菅生 逆じゃないですか？お若くて人気の先生でいらしたのでは。

三浦 いやいや、すごく熱心な学生とそうじゃない学生ってどこでもありますよね。僕なんかもう怒鳴りちらしたし、チョークなんか投げたりしましたよ。今だったらバワハラで一発でアウトですよ。でもその時の教師ってみんなそうでした。怒鳴りとばしてね、教室から追い出したりしましたから。

高橋 教室から出ていけなんて。そんなこと、今は大変ですよ。

三浦 でしょ。今そんなこと言ったらもうアウトでしょう。連発してましたよ。

高橋 その古代って。僕は近代ばかりずっと勉強してるのでよくわからないのですが、古代って意外（？）に人気なんですね。

三浦 要するにね、わかりやすいんですよ、と思います。例えば平安の物語、源氏なんかだったらさ、難しいじゃないですか。人間関係もそうだし、文章も理解しにくいよね。だけど古代って割と文章単純だし、表現もそんなにひねってないし。だから、そういう点では分かりやすいっていうのはあったと思います。ただ何でもやってればいいかっていうと、やっぱり学生の好みがあって、歌だと短歌でもわかりやすい「東歌」を扱うとか。そのうち『サラダ記念日』が出て流行ったので恋歌を読んでみたりもしました。

菅生 俵万智だったら、八七年、八八年のブームは「社会現象」でしたね。

三浦 万葉集の短歌なんかを学生に読ませると、自分で調べて発表したりするのも割と楽しんでやるんですよ。で、議論もしやすいし。だからそういうものをやるとかが、僕、割と勤め始めてしばらくの間は。だから、やる科目って、短歌、特に東歌みたいな単純な歌やるとか、それから昔話、それから遠野物語。だから古代文学自体よりも、民俗学的な物語をひとつずつ読ませたり、あるいは僕が講義したりとか、それから昔話を演習で使ったりとか。

だから僕、一番最初に出した本が『村落伝承論』（五柳書院、一九八七年）って言うんですけど、それは遠野物語を扱った本なんです。その本は、ここでやった授業が元になっている。それを、だから何年間かここで喋り続けて、で、雑誌に書いたりして、それで本にしました。その次書いたのが『浦島太郎の文学史』（五柳書院、一九八九年）で、それもここで全部授業でやってたものなんです。講読かな、講義かななかで、ずっと何年間か話してて、それでそれ

をまとめて。だからここで喋りながら文章にするっていうのが多かったんです、論文もそうです。そういうことができる学校だったというのが、僕にとってはありがたかったですね。

幸せな時代っていうか、バブリーな時代というか。

高橋 いろんな意味で共立バブルでしたね。

三浦 このころの学生たちは、結構そのバブルな時代を謳歌したんじゃないでしょうかね。教員もそうだったと言えるのでしょうかね。

五 教職課程について

菅生 ところで、教職課程があったころは、どのような状況だったのでしょうか？

三浦 僕も教育実習の授業見学に何度も行きましたよ。はい。公立中学がものすごく荒れてる時代でね、そんな学校で、授業が途中で止まっちゃって、泣き出しちゃう実習生の教師がいたりした頃ですね。

高橋 僕が見回り行ったとき、実習生は近代詩を教えてたんですよ。詩なんてそれなりに予備知識があつて、詩への関心がないと、面白さをなかなか伝えられない。まだ十九か二十歳だし。それを見て、ちゃんと指導できていなかった自分に居たたまれない気持ちになったことを覚えています。

その後、校長室でかつ井か何かをこちそうになったのですが、頼りなげな新米教師は校長先生にはどう見たのか。緊張の一日でしたね。

菅生 そうですね。九十年に教職課程が廃止されたのは、学校側の決定だったのでしょうか。

三浦 よく覚えてないんですけどね。教員の側としては、そんなに止めることに賛成してなかったと思うんですが。

高橋 そうだと思います。だって、僕が入った頃、なんであれ止めたんだとか、あれさえ止めなければなんて話をね、度々聞いた記憶があります。

三浦 なれるかどうか別にしても、教員になりたいって思ってた入ってくる学生はいたしね。

高橋 だから、免許だけでも、取れる道を残しておけばよかった。

三浦 で、ある程度単位取っていれば、四年制に編入してプラスできるんですよ。だから、そういう点ではなくす必要はなかった。もちろん、難しい状況ではあったろうけど、その教職課程を維持するためには。

高橋 教育心理学とか、そういう教職関係科目を全部揃えないとまずいんですよ。書道もありましたね。僕が最初に勤めた短大では、専任の書道の先生っていましたからね。

三浦 そう、書道がなんかネックになったような気がします。いや、きやいけなかったから、特に中学はいないといけなかったんじゃないですか。必修だから。でもそれは非常勤になってるところもありますよね、今はね。でもあの頃、いなくちゃまずい。加えて四年制にもいたから、両方やってもらってたような気もするけどな。書道が話題になっていたのは確かだよな。

高橋 そんなこんなで、教職課程を廃止しましたが、やっぱり教職

課程ってあるかないかで、受験生の関心も違うみたいですよね。

二〇二二年だから、つい二年前に、文芸学部で藤田岳久先生と錫田拓哉先生の協力で図書館司書課程を復活させたんですよ。復活させるっていうか、正確には文芸学部に行つて聴講で取れるようにしたんです。そして、やっぱり問い合わせも多くなりました。取得するしないは別として、資格が取れるような短大に行かせたいと思つて親御さんが多いようなんですね。そういう意味では、教職課程を今更戻すわけにいかないんですけども、ひとつの大きな魅力だったんですよね。

三浦 そうだと思いますね。図書館司書教諭なんかも同じですよ。特に女子学生は。図書館司書っていうのは興味があるから、やりたい職業でもあるし。今、図書館で戦争もやつてるしね。そう、『図書館戦争』なんて(笑)。

司書教諭と図書館司書とは別だけど、でも、司書教諭っていうのも惹かれた人たちはいたと思いますね。

高橋 司書教諭ってのは教員の免許がなくちゃまずいそうです。連動してますからね。今回復活させたのは、図書館司書の方ですね。

三浦 そうそう、性格は全然違いますからね。

六 2L2Cと正課外活動

高橋 いい時代はいつまでも続くわけにはいいかなくて。文科をどういう学科にするかということが問題になって、そのころ構想を提案してくれたのが、三浦さんの後任だった岡部さん(岡部隆志教

授)なんです。

二〇一五年の話ですけども、日本文学・表現コースの枠組みを岡部さんが考えて、これを2L2Cって名付けました。つまり、Literacy (ことば)、Literature (文学)、それから、Culture (文化)、Create (創作)、この四つを中心に置こうというわけですね。

三浦 なるほど、なるほど。

高橋 これは、今でも、生きてるんですよ。そのクリエイト部門には、児童文学はじめ、サブカルっぽいものがいっぱいあります。創作の先生も岡部さんの人脈で呼んで来てもらったんですが、なかなか好評で、創作演習の授業を受けてみたいと言つて受験する高校生もいます。

「クリエイト」なんて、なかなか思いつかないことを、自由な発想で提案してくれたのがよかったですね。

三浦 この話はちよつと彼から聞いたことがありましたよね。確かにリテラシーとか、ちよつと面白い問題ですよ。クリエイトもそうですよね。今、四年制の文学部で、いろんな創作コースを持つてる学校増えましたよね。日芸あたりがはしりで、早稲田などにもある。

高橋 そうです。短大にも「クリエイト」なんていう授業を作つて、特徴を打ち出す。それに習つて、英語コースも、four skills—reading、writing、listening、speakingの四つのスキルの教育を打ち出して、特徴づけた。

当時は、短大を縮小していつて、緩やかな「なんとかコミュニケーション」みたいに作る動きがありました。一方で、文

科の先生方には、きちっとした専門を持っていないとダメなんじゃないかという共通理解があったんです。

短大だからこそ専門領域をきちっと立てておかないと、と考えてたわけです。

三浦 いや、僕は辞めさせてもらったけど、岡部さんがあと入ってくれて、それはとってもよかったなと思ってます。

高橋 そうですね。他にもありますけど、正課外活動にもアイデアを出してくれました。リテラシー教育として「千字エッセイコンテスト」、これは今でもやっています。それから文科読書室といって、ひと部屋を確保して、読書室委員会が好きな本を選んで配架するミニ図書館みたいなもの作ったのも岡部さんです。また、リテラシーポイントってのは、後に全学でも作られたわけですが、文科でいち早く作ったのも功績です。

七 同人誌『あかね』

菅生 この『あかね』という同人誌についてはいかがですか。私は存在すら全く知らなかったんですが。

三浦 いやいや、自分でなんか創作してみるとか、そういうのって、学生たちって、ものすごく興味を持ちますよね。今、どんどん増えてるでしょ。「あかね」は同人誌の「はしり」ですよ。担当の助手と教員は決まていましたが、企画や編集は全部学生がやりました。教員は手を出していません。

「あかね」の委員は、四月のガイダンス時に、あかね委員になり

モンキー・パンチ先生 インタビュー



平成10年8月6日

《御仕事場にてお話を伺いました》

『あかね』44号より。「モンキー・パンチ氏、吉本ばなな氏、瀬名明氏にインタビューした。50号では村上春樹氏にメールインタビューをした。

たい学生を募集して、助手がやり方を教えるだけで、あとは学生に任せてたんですよね、その分、年によって随分ムラはありますけどね。

高橋 うん、そうでしたね。僕の記憶では、費用は学生全員から手が集めてきましたが、それが大変だった。だんだん払いたくないという学生が出てきたりして、同人誌を出したい人たちが費用を出せばいいっていう、そういう議論になっていってしまったから、維持が難しくなつて、終わってしまったんです。

三浦 そんなことは、最初はなかったんですけど、終わるときは、そうなるってしまうのですね。

菅生 それを作るといことが。編集の作業の一通りを實際やって

みる。それこそ出版に興味がある人にとってはまさにOJT（On the Job Training）なんですね。当時そういう言葉はなかったけれど、一連のこれを仕上げるまでのここの学びというのは、まさにプロジェクトワークであり、アクティブラーニングだなと思いました。

三浦 それはもう、そういう積極的な意見もあって、いろいろ手を考えたんだと思いますけど。実際に編集者になったり、出版社に勤めたというような学生は、ほとんどいなかったんですけど、希望は多かったですね。

高橋 そうでしょうね。『あかね』は何年ぐらいまで続いたんでしょうか。

三浦 五一号が一番新しい。二〇〇六年ぐらいまででしょうか。

谷川俊太郎さんの寄稿がある号もありますね。谷川俊太郎さん、対談のときに確か自分の詩をこの雑誌に提供して、それを最初に載せたりして。何号だったかな。

高橋 四二号（一九九七年）号ですね。谷川俊太郎さんの原稿をもらうなんて、今では考えられない。（高橋注…この号には秋元康さんと「あかね」委員との対談が載っています）

菅生 素晴らしいですね。『あかね』のバックナンバーを見ていたら、『魔女の宅急便』の角野栄子や氷室冴子にもインタビューしていて、驚きます。

三浦 ほんとにね。うん、よく応えてくれたと思いますよ、あの頃は。今だったら、ほとんど拒否されると思いますね。

菅生 委員の学生は、メールほど手軽じゃない手紙で、それも直筆

で書いて依頼していたんでしょうか。

高橋 メールのような手軽なツールだと、なかなか心にひっかからないかもしれませんね。谷川さんに直接会いに行っただけですか。

三浦 学生が自分たちで好きな作家がいたりするとやりたがるの、編集って。それで、その人に連絡して直接手紙出したり、電話したりしてお願いをした。すごいことですよ、それで、オッケーしてくれるというのは。野坂昭如とか、まあ、ちょっと若い女子に会って話してみようかというような作家もいて、ウイスキーとかお菓子を持って自宅や事務所に行ってインタビューをする。なかには共立に来てくれて、教室で取材を受けられたりとかもしたようです。

高橋 三号館に来てくれたんですか。すごい。

三浦 たしか、氷室冴子さんの時もそうだったと思います。氷室冴子の没後十年の二〇一八年に、『文藝別冊』で氷室さんの特集が出たのですが、そこに僕が、原稿頼まれて書いたんですが、その時にね、『あかね』という雑誌で、学生たちが氷室冴子にインタビューしてるよと編集者に話したら、ちょっと時期的にめずらしい対談だということで、編集者が面白がつて再掲載させていただきって言うんです。それ、掲載されましたよ。

その時、岡部くんに許可を取ったはずですよ。

高橋 すばらしい学生さんたちだね。『あかね』の三八号（一九九三年）ですね。

三浦 ええ、その号の記事です。氷室冴子さんは、病氣かなんかで仕事してない時期だったですよ、その時期で。それでも会って来て、結構面白いことを喋ってんですよ。次の企画の内容につい

て、とか。

高橋 普通の編集者でも聞かないような、ものすごい突っ込み方ですよね。「終わり方は決まってるんですか」みたいな。それがまた良かったんだろうね。

そういえば、佐藤すみれ（沙藤董）さんという卒業生、『彷徨う勇者魔王に花』（中央公論新社）という小説で「第九回C★NOVELS大賞特別賞」を受賞し、実際に作家になったんですよ。現在も活躍中です。

三浦 それはすごい。そういえば僕が教えてた学生の一人で、KADOKAWAから、単著じゃないんですけど、共著で本出したり、そういう人もいたりしますよ。

高橋 面白いですよ。このころ、英語専攻でも『共立文科』という雑誌を毎号出してたんですよ。文科、頑張ってた。

三浦 こういうことができたことが強みだったですよ。学生たちが本当に自分たちでこういうことができていたんです。それはあらゆる面で生きてるような気はしますけどね。

僕の知り合いが、専修大学にいて、元編集者で、文学部の教員になって、それでマスコミ関係とか出版関係の話してんですけど、ゼミはやっぱり雑誌作り、一年間でこれはもう本当に本格的な雑誌を一冊ゼミで仕上げるっていう、そんなことをやってたりしてる講座がありますけど、学生はすごい。その雑誌できたのしか僕なんか見たことないけど、一年間追っかけていろんなテーマを追ってるとかなかなか面白い。うん、そういう講座だって可能ですよ。

高橋 一冊本を作るという授業ですか。四年制大学だからできるの

かな。いま、文科では「出版メディア論」という授業がそれを目指しています。

菅生 出版にお金かけずに済むオンラインジャーナルみたいなものでも、またできたらいいですね。

三浦 そうですね。今だったら、やり方は色々ありますもんね。今はもう同人誌作りなんているのは若い人の方がよく知ってるかもしれないですけど、そういう形で簡単に本を作れます。こういう雑誌だったら本当にほとんど金かけなくて作れてしまいますから、今の方がずっと作りやすい。やる気があればと思いますけどね。

高橋 卒論の文集だけでもこうやって作りたいですよ。何年か前まで教員も手伝って作ってましたが、オンラインでできるようにすればいいかもしれない。

三浦 卒業論文は今でもやってるんですか。

高橋 ことばの研究や文学作品の研究は、僕が来た一九九〇年の頃は希望者だけでしたよね。

三浦 はい、希望者だけ。

高橋 今は全員、必修です。文章教育の一環として。指導は大変ですけども。でも、書かないと卒業できないから、皆さんみんな千字くらいのを書いてます。創作の場合は一万六千字を基準としています。

三浦 それは大したもんですよ。特に短大で二年間しかなくて、それは八千字でも、いや、もう、だって、四年制でもさ、大変ですよ。

八 コロナ禍と現在

高橋 話していると、いい時期の話がいっぱい出てくるんですが、二〇二〇年、コロナがはじまって、一気に空気が変わった時期に、僕、文科長になったんですよ。

三浦 それはたいへんでした。ほんとね、学校によつては、そのまま閉鎖されてしまって、僕の友人なんかも、それで職場を失ったりしたし、これは全体的な傾向でしょ、文化系の大学の。短大だけではすまなくて、大学でも同じようなことが起こりましたしね。

高橋 三浦先生もオンデマンド授業などは経験したんですか。

三浦 僕はしてません。僕、辞めたのは二〇一七年だったから。

高橋 二〇二〇年三月に岡部さんと菅野さん（菅野扶美教授）が同時に定年退職されて、それでそのあと僕が継いだんですけど、そこまでは文科の入学生が一〇〇人ぐらいいたんです。定員一〇〇人の一〇〇人です。それが、コロナの翌年に激減してしまったんですね。もう元に戻らないんじゃないかと言われたりして、それでも踏ん張って、毎年十人以上増やしています。なんとか短大を止めさせないようにとね。

流れは流れとして、元々職業学校で勉強する機会の少ない人のためにやってきた学校だから、苦しくとも続ける責務があると思ってるんですよ。

たとえば、最近の学生の保証人とかを見ると、お母さんが多いんですよね。いろいろな事情があつてそうなんだと思いますが、経済的な点から短大にきているのかもしれない。あと、話聞いてみる

と、お兄ちゃんやんは四年制にやっただけ、妹までは行かせられないと言われたとか、そういう事情の学生が結構増えてきています。

三浦 お話はよくわかりますし、多くの大学にとって切実な問題です。僕が最後に努めた四年生の私立大学でも同じ状況がありました。アルバイトに追われて途中で辞めてしまう学生もたくさんいました。

共立の場合、神保町という場所っていうのは、やっぱり特権的な部分があるからさ、そういうのをうまく利用しながら、今おっしゃったような問題を、生かしていければいいですね。学問とかいう問題だけでなく、別の形で何が与えられるかっていう、それこそこの創作なんかの問題も含めてそうだけど、そういう魅力を、どこかで見つける必要がありそうな気がするんだよね。

なんだろうね、彼女たちが求めているのはなんなのかっていう。しかもそれは今多様化しててバラバラだから。

菅生 先生がおっしゃった二年、何を与えられるかっていうところでは、今の学生は本当に二年間でも、授業のほかに空いた時間を惜しむようにアルバイトを入れているんですね。学費の足しと必要なお金のためにアルバイトをしているという、そういう学生が多くて、立派な図書館があつても、図書館でゆるりと過ごす時間が少ない、というところが見受けられますね。

三浦 こちらは、ずっと女子大でやっていこうとしてる？

高橋 そう、そうみたいです。だけど、考えてみれば、共立女子学園つていう名前、共学にするのは難しいことかもしれないし、このブランドから離れるのはやっぱりちょっと冒険ですからね。

ただ、気になるのは、その方向つてのが、役に立つものの方に勢いよくすすんでいるんです。

三浦 なるほど。はい。

高橋 役に立つって言ったって、タイプライティング、ワードプロセッサ、パソコンという急速な技術革新を考えてみれば、今日役に立つことが、明日役に立つとは限らない。有用性に向かうのは、時代の流れで止めることはできませんが、（小さな総合大学を目指す）共立のブランドを維持するためには、やっぱり人文的な教養とどうか、そういう風なものをバランスよく保つてないと、と思うんです。

三浦 多くの学生は多様化してますけど、女子学生の要求みたいなものが、割と社会に出て役立つことしたいみたいに思ってる人たちは増えてるのは確か。

高橋 そうですね。

三浦 だから乗りやすいっていうか。もう自活していかなきゃ、男なんて頼ってられないし、親は頼れないしってなったら、自分で生きていく方法を見つける。そうですね。それはとても健全な考え方だと思うんですね。

それをとどめることはできないから、それをバックアップしながら文系的に何ができるかっていう、そういう問題じゃないかっていう気はしますよね。相変わらず、文学でっていうだけではとても難しい。これはもう、よその学校っていうか、今まで見てきて、本当に少なくなってるっていうか。それは確かだよな。一部にはコアな連中がいますけどね。それはそれで。どっかこう、限られたと

ころへ行ってしまういような気がしますね。

高橋 そうですね。四年制大学と短大ではちょっと事情が違いかもしれませんが。文科では二〇二二年からコース名をさらに変更し、「日本文学・表現コース」を「日本文化・表現コース」に、「英語コース」を「グローバル・コミュニケーション・コース」と改め（「心理学コース」は変更なし）、新たな方向を模索しています。「日本文化・表現コース」に限って言えば、メインカルチャーとサブカルチャーのいずれかに偏らない教育、表現されたものを徹底的に読むことによって、しっかりとした「考えるツール」を身につけ、それぞれの表現力を磨くというものです。文化論的な方向に舵を切ったといったらいいか。技術のバックボーンになるものを学ぶといったらいいか。

三浦 そうですね。共立に行きたいっていう学生を少しでも増やして、文化論的な方向へ目を向けさせるのが大切だと思います。

九 「人文知」について

菅生 先日、全国学力調査の結果が公表されて、中学生の国語の読解力が低下しているのではないかという報道がありましたね。SNSを使ってる時間が長いほど、正答率が低くなる傾向が見られたそうです。

三浦 それは言われてますよね。前から数学がでなくなつたのもそのせいだとか。数学ができないのは読解力がないからだとか。

高橋 読解って、言葉の問題だけに限ったわけではなく、社会現象

とか、時代の空気とか、いろんな表現対象を分析して、自分の頭にある世界観や枠組み（パラダイム）にあてはめたり、ズラしたりして理解していつてるわけでしょう。いわば人文知的なものの考え方が根底で働いている。

三浦 で、そういうことってというのは、目に見えないし、実際に成功しても数値化できないんですよね。テストしてっていう、その新聞の記事みたいにして、一斉テストしてなんか出せばある程度分かるかもしれないけど。

だけど、読解力ついたっていうのを自覚させられないと、成果が出ているように見えない。それがまずいんじゃない。うまくそれを出せるようにこんなに身につきました、二年間ですけどっていう、そういうのがうまく示せるようになると注目されるようになる。

同じように、何のために文学部はあるんだとか、何のために文学をやるんだとか、そういう議論ってありましたよね。さらにいえば、文学は必要なのかとか、そのところになかなかうまく答えられなかった。でも、心に残るものがある。

高橋 そうですね。役に立たなくていいんだ、役にたたないという価値があるんだ、そういう風に思い切ろうとしたこともあった。でも、「意味あることだ」ということを、はつきりこちら側から、きちんとした言葉で伝えていかなければならない。

三浦 そう。それを実践しようとしたのが、さっきの岡部さんなんかのカリキュラムに表れている、それは大いに評価するけど、それをどういう形で進めていったらいいか。

共立が創られた初期からの、一本の糸みたいなのを生かしなが

ら、だけどそこへ、単にその実学的なことだけではなくて、もう一本別の柱が必要だという気がします。

高橋 僕は、それは「実学とアート」のような気がするんです。一方において実学を進めると同時に、建築デザイン学部って名前のとおりアートな部分があるのではないか。文芸学部には劇芸があり、シナリオライティングがある。文科にはクリエイティブの小説の創作がある。そういう風なもので言えば、キャッチフレーズは「実学とアート（表現）」が相応しいかと。それをうまく学園全体のカリキュラムのなかにバランスよく作り込むでいく。

三浦 それはいいキャッチフレーズになりそうだね。で、当然、その二本立てっていうか、二つの面っていうのはうまく支え合わないといけないと思います。

高橋 今はそこまで届かないけどね。そういうような、一見相反するようにみえる意外性に関心を引きつけることで独自性になるのではないか。どうやってその「実学とアート」って一つになつてののか、「実学とアート」ってどんなことをやろうとしているのかを考えさせる。もちろん、カリキュラムとしてですね。

三浦 そうですね。

僕は、このところ誘われてっていうか、仕事でしゃべりしたりする機会があるのですが、そのなかで求められて、企業研修に係っています。たとえば理系の大手企業の社員研修に関わっていて、その会社で将来役職に就くような社員は理系の大学出身者が多いのですが、そういう人たちは人文系の知識や考え方が不足しているというので、僕なんかが神話の話をしたり、別の人が宗教の話を

したり、哲学の話をしたりする。そういう年間カリキュラムが作られていて、そこでリベラルアーツを取り込もうとしているのです。

そこでおしゃべりをしていて、40代ぐらいの社員と話したりするんですけど、結構そういうのって興味を持ってくれて、こちらも面白くなります。そのために企業は相当の予算を付けているらしいんですけど、人事課の人が言うには実際に役に立っているというんです。継続して十年ぐらいやってるらしくて、講習を受けた人たちがだんだん上の方へ行く。そうすると、そういうカリキュラムを受けた社員とそうじゃない社員とはどうも考え方が違うと言っているんです。だから高いお金をかけて毎年毎年そういう教育をやっている、そういう企業が増えていくようです。多くの大学が、ある時期からリベラルアーツ、いわゆる一般教養っていうのをなくしたでしょ、ほとんどの大学が。あれがどうも一番大きな問題で、専門しか知らないとかいうことになって、教養教育がほんとに必要なだっていうふうに改めて認識されているようなのです。

菅生 いいお話ですね。

三浦 そういうのをうまく活かせられればね。大学教育の中で。

高橋 そうですね、人文知の問題として。それにしても、文系的な知が理系の企業経営でも必要とされてきているというのが、とても新鮮で意を強くします。

菅生 さっき話題になりましたアートを介する力っていうのは、教養の核になるように思います。そういうものって絶対に人の一生を左右するものですよ。社会へ出ると行動範囲が広がるし、旅行した

り、住むところが変わったりしますよね。そこで、教科書で学んだ歴史や文化や文学や美術にあらためて触れて「ああ、あのとき学んだことは、これだったんだ」と腑に落ちたり、知的好奇心が刺激されたりするという経験は、心の豊かさを作ると思います。そうすると、心の中に、何があっても追い詰められない楽しい気持ちを確保できると思うのですね。

高橋 「アート」って、原義をたどれば、「神の創造物」に対して「人間の創造物」であり、哲学・文学・歴史だけでなく建築などを研究することも指しているようです。文科でずっと大事にしてきたテーマとも重なっています。いろいろなものが繋がってくる。

この対談を始めたときは、どこへ落ち着くかと心許なかったのですが、落ち着くところに落ち着いてきたようです。

僕は、来年（二〇二五年）の三月に退職しますが、三浦さんはじめ諸先輩たち、卒業生たちと共有してきたもの、文科の歴史、価値観などを、なんとか未来へつなげられたらなあと、今日の話をとおして改めて思いました。もちろん、この対談を読んで下さっている人たちにも是非届けたい。

高橋 ところで三浦さん、この写真を見たことがありますか。

三浦 えー、いつの写真ですか。僕の左に写っているのは高橋さん？

高橋 ええ。

菅生 ずいぶん若いですね。

高橋 三浦さんがお辞めになる年（一九九四年）の謝恩会です。一

緒に泉谷しげるの『春夏秋冬』を非常勤の安藤恭子先生、島村輝先生と演奏しています。三浦さんは、とても気持ちよさそうに朗々と歌っていたという記憶が残っています。

三浦 懐かしい。そういえば僕、今も泉谷さんのライブに潜入しています。泉谷さんも聴衆も歳をとって、僕は「こぶとり爺の宴」と呼んでいます。コブのないう小太りな爺さんばかりが集まっつてよろよろとジャンプするのです。いつまで続きますかね。

高橋 もうそろそろ時間でしょうか。

三浦 先生、長時間お付き合い下さりありがとうございます。有益な話をずいぶん聞かせていただきました。とても楽しかったです。

このあと、場所を変えて、もう少し積もる話をしたいですね。ただし、今度はICレコーダーなしで。

三浦 はい、そうしましょうか（笑）。



三浦 佑之（みうら・すけゆき先生プロフィール）

千葉大学名誉教授。一九四六年、三重県生まれ。成城大学大学院博士課程修了。

共立女子短期大学教授・千葉大学教授・立正大教授を経て現職。古代文学、伝承文学研究専攻。二〇〇三年、『口語訳 古事記』で第一回角川財団学芸賞を受賞。最新刊は『口語訳 日本霊異記』。現在、ウェブ上で「神話と昔話三浦佑之宣伝板」(<http://miuras-tigerlacocan.jp/>)を運営。